九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宮城学院女子大学「英語リテラシーI」（2年生）授業実践報告

半田, 幸子
ノースアジア大学法学部 : 准教授

https://hdl.handle.net/2324/4822590

出版情報：オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.89-89, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

KYUSHU UNIVERSITY

宮城学院女子大学「英語リテラシーI」(2 年生)授業実践報告

半田幸子

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は、前期開講の必修科目、90 分間の授業であり、英語の書き言葉に関する運用能力を育成することを目的として行われた。

授業の形式は、大学から同期型向けとして推奨された Microsoft Teams(以下、Teams)を主として用い、授業時間にはTeams 内のビデオ会議機能を利用した。初回授業のみ、大学に指定された通り、学習支援システムのユニバーサル・パスポート(UNIPA)を用い、課題を掲示した。

初回授業の課題の一つとして、通信及びデバイス環境の調査を行い、回答結果から、Teams およびビデオ会議での授業も実施可能であると判断し、Teams の使用を主軸とすることとした。

第 2 回から主に Teams にて指示を出し、ビデオ会議にてライブ授業を行った。基本的には、受講生はビデオとマイクをオフにし、筆者はマイクのみをオンにして、資料の提示以外は音声のみにて行い、出欠および課題の掲示は Teams で行った。

ライブ授業は対面授業に近い形で行えることを想定し、以前から検討していた教科書、Josef Tabolt、森永弘司『Our Time, Our Live, Our Movies: 映画で読むわたしたちの時代と社会』(金星堂、2017 年)を用いることとした。当該教科書は 15 課立てで、各課に映画一作品に関する 500 語程度の評論が掲載されている。オンライン授業では、受講生の様子が即座に見て取れないことから、量より丁寧さを重視し、3 週で 1 課、学期中に3課を扱うこととした。

受講生には、1 課ごとに事前の映画鑑賞と感想を求めた。映画鑑賞は、授業理解の補助や視野の拡大に加え、外出自粛中の気分転換としても有効であると考え推奨したが、鑑賞の有無は義務づけてはおらず、評価の対象外とした。1 課につき1～2 回目を読解、3 回目を作文の時間とした。

授業形式は、音声のみだが対面授業と同様の緊張と緩和を与えることを目指し、長文は事前に担当者を決め、教科書の問題回答にあたっては、その場で指名した。毎回の課題として学びの振り返り(学んだことや不明点等)について短文を書くよう求めた。質問は、授業後に音声、チャット、課題提出を通して受け付けた。翌週の冒頭には、提出された記述の共有や質問への回答などフィードバックを行った。

通信等の不具合による欠席へのフォローについては、資料掲示するとともに、音声やチャット、メールなどで個別に対応した。

Teams 上の課題機能を用いて、学期中に小テストを 2 回行い、期末試験も行った。小テストの取り組みから、工夫次第で期末試験も問題なく行えると判断した。実施にあたっては、条件を等しくするため持ち込み禁止をなくし、不正行為防止のため回答時間に対して問題数を多くした上で、画面上を巡回した。通信の不具合による提出の遅延は受け付けた。

成績評価の方法は、出席を含む授業への取り組み 30%、課題への取り組み 30%、小テスト 20%、期末試験 20%とした。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

紙幅の都合もあり、今後の課題や可能性に対する検討自体を今後の課題とし、ここでは、受講生の反応を報告したい。

受講生からは、授業冒頭でのコメントの抜粋の共有や質問への回答などフィードバックが大変好評であった。対面形式であればごく自然に無意識のうちに自身の習熟度や理解度を相対的に確認できるが、オンラインではそれが叶わない。それゆえに不安が生じていたなか、他の受講生のコメントを聞くことは大きな安堵感や充足感を生んだようである。他の受講生も自分と同じ不安や悩みを抱えていることを認識したり、異なる意見を聞いて視野拡大につながったりしているとのコメントもあった。また、音声で他の学生の発音を聞くことも刺激となり、学習意欲につながっている様子が受講生のコメントから見て取れた。